

# 社会システム概念 - 再考

## —ルーマン理論の応用に向けて—

### A Review of the Concept of Social Systems: Towards the Application of N. Luhmann's Theory

成城大学社会イノベーション学部教授  
村田裕志 MURATA, Hiroshi

#### 〈目次〉

1. はじめに
2. ルーマン理論の意義：三つの要点
  - (1) 社会的意味空間の分節化
  - (2) マクロ社会の意味論とマイクロ社会の相互作用モード
  - (3) 差異の観察とシステム形成
3. ルーマン理論の難点
  - (1) コミュニケーション概念の特異性
  - (2) オートポイエーシスへのこだわり
  - (3) 機能分化の偏重
  - (4) 過剰な反 - 人間主義
  - (5) 西ヨーロッパ近代主義の限界
4. ルーマンの社会システム概念のプラグマティックな拡張

#### 1. はじめに

2020年代において「システム」(system)という用語・概念は多方面でますます広汎に多用されており、また「社会システム」(social system)も同様の傾向にある。21世紀の現代社会が、旧来の「機械・装置」「有機体・生体・器官」「集団・組織」「制度」などの語彙では的確に把握・表現しきれない、新種の物理的・工学的・情動的・生物的・社会的・文化的な現象あるいは現実のも

とに営まれていることが、多くの人びとの感覚・意識においても日常化されてきているからであろう。以下で論じる社会システムについては、もちろん社会学にかぎられた専管事項ではなく、近年では、むしろ社会学領域以上にビジネス・経営学・社会工学・都市工学などの方面の言説においても頻出している。もっともビジネスやエンジニアリング方面の記述に登場する社会システム概念は、おおむね定義されないまま便宜的な用法のもとに使用されている。とはいえ今日、社会システムという表現が多くの人びとに暗黙に了解され通用している以上、それらに照応する社会的現実は確かにあるとみられ、人びとが日常的にいだくそうした実感は、当然、社会科学の基礎概念にも反映されることになる。

さて、社会システムについて学術的に「概念的に把握する」役目は、社会学の理論研究分野の責務でもある。社会学における社会システム概念<sup>1)</sup>としては、社会システムを「行為のシステム」もしくは「役割のシステム」とする見方が1950年代～60年代に普及し主流とされてきた。もとより社会システムという用語の登場はそれよりも古く、H. スペンサーやV. パレートにより使用されてはいるが、社会システムを行為システムや役割システムとしてとらえる現代の社会学に普及した見方は、M. ヴェーバーの「行為連関」や機能主

義的社会人類学の「社会構造」の視点に依拠して、20世紀なかばに、T. パーソンズ、R. マートン、G. ホーマンズなど当時を代表する社会学者あたりから採用されはじめた観点にほかならない。しかるに、行為システムや役割システムとされてきた旧来の定番の社会システム概念は、2020年代の現代社会における広汎にわたる潜在的な要請に適合するべく更新される時期にきているといえよう。

この半世紀あまりの間に社会学領域において社会システム概念を革新するなんらかの契機があったのかといえ、そのきわだった機会としては、N. ルーマンによる1970年代～90年代にかけての独自の社会システム理論の提唱が挙げられるであろう。ルーマンの理論は1980年代から今日に至るまで、世界の現代思想系・社会科学系の知識層の一角で話題となり、とくに日本ではかなりの反響を呼び、大型書店には関連図書の棚さえ特設されようになった。とりわけ「ルーマン語」と揶揄されるもする奇異で難解な術語の数々<sup>2)</sup>、たとえば「オートポイエーシス」「コンティンジェンシー」「複雑性の縮減」「自己言及」「観察」「自己記述」等は、ポストモダン思想好みの知識層の一部では一種の流行語にもなり、大学受験の入試問題の文章にさえ登場したほどである。またルーマン理論への関心の高まりにかかわる影響関係のほどは定かではないものの、同じ時期から国内各所の実務の現場で、団体・組織・制度の「内部評価」「内部監査」「自己点検」など、各種の社会システムの「自己組織性」や「自己観察」が強調されてきたことも興味深い。それもまた、21世紀的な社会のあり方を特徴づける傾向なのかもしれない。

しかし、ルーマン理論の(局所的)“流行”を機会に社会システム概念そのものが全般的に革新され、従来の(おもにパーソンズに由来する)行為システム・役割システムに代替する新概念として定着したのかといえ、それほどの画期的な成果には至っていない。なによりも、ルーマン独自の理論体系の内容そのものが広汎には共有されがたく、たとえ、ポストモダン嗜好の局所的な関心を喚起しても、より広く社会科学的で実証的な場

面への適用となると、あまりにも問題点がありすぎるからにほかならない。

しかしながら、ルーマン理論には旧来の社会システム概念を刷新しうる斬新な内容が多分に内包されているとみる認識は、研究者のあいだでは少なからず共有されている。しかるに、その理論内容の現実的な展開を阻んでいる要因は、ルーマン自身の膨大な著作群の論述そのもの、くわえて、その読解を専門とする研究者たちにも共通する過度に銜学的な姿勢にあるように思われる<sup>3)</sup>。没後すでに四半世紀近くを経た今日、次々世代のもとで取り組むべきは、社会システム概念の刷新に向けて、まずは、ルーマンの発想の意義を明確化し、それを参照し依拠しつつも社会的現実に合わせてその理論に加工を施し、現代において広く活用可能な社会システム概念を提示する企てであろう。

そうした観点に立ち、以下の論考では、ルーマンの社会システム理論の評価されるべき意義についての要点を要約し(第2章)、つぎに、社会科学的な活用におけるいくつかの難点を指摘し(第3章)、そして、新たな社会システム概念の構想に向けての留意点を提示する(第4章)、という順序で論じていくことにしたい。

## 2. ルーマン理論の意義：三つの要点

パーソンズもルーマンも20世紀後半の社会学理論史に輝く巨匠として記録される半面、遺された膨大な著作群の内容は、(良くいえば)独創的な着想の数々、(悪くいえば)実証性にとぼしい“思いつき”の羅列にしか見えないという戸惑いをあたえることもたしかである。少なくとも、“学術”(Wissenschaft)的ではあっても、反証可能的科学あるいは実証科学(science)の成果とはいいたいがたい面がある<sup>4)</sup>。それでも、各々の生涯にわたり理論的な一貫性をたゆまず追求した姿勢は稀有であり、そうした思索をとおして傑出した着想や洞察がもたらされている。しかるに、それらの意義を特定しようとなると、やはり容易に把握されがたい状態にとどまっている。それゆえ半世紀もしくは四半世紀の歳月のふるいを経た今日におい

てこそ、遠近的な距離認識のもとであらためて両者の理論に焦点をあて、その意義を現代的状況を加味した視角から析出してみる必要がある。

そのような観点から、パーソンズ理論のきわだった意義について振りかえるならば、それは、なによりも「AGIL 図式 (LIGA 図式)」にこそあったとみることができるし、ルーマン理論のばあいには、「社会的意味空間の分節化」とでもいうべき視点から「社会」をとらえる学説の提唱にこそあったと考えられる。本章では、そのルーマン独自の提案が、いかにして社会システム概念の刷新に結びつくのかをめぐって、まずは以下の三つの論点を明示して、各々の意義について論じていくことにしたい。

- (1) 社会的意味空間の分節化
- (2) マクロ社会の意味論とミクロ社会の相互作用モード
- (3) 差異の観察とシステム形成

### (1) 社会的意味空間の分節化

ここで「社会的意味空間の分節化」とする表題は、実は、ルーマン自身のものではない。ルーマン流の表現を引用すれば、以下のような一連の文言<sup>5)</sup>にあたる。

「社会学の基礎概念としての意味」「社会システムはコミュニケーションの統一的な（自己言及的な）連関という基礎の上で構成されてきたもの」「コミュニケーションを通してコミュニケーション・システムとして形成される社会システム」「全体社会とは意味を構成するシステム」「意味は、心的システムおよび社会システムの、つまり意識ないしコミュニケーションによって作動するシステムの普遍的メディア」「システムは自己の作動の連鎖によって環境から自己を区別するもの」「区別して（差異を設け）、その一方を指示する」など。

以上の抽象的な文言に散見される「社会システム」「意味」「コミュニケーション」「全体社会」「意味構成的システム」「メディア」「システムと環境」「区別」「差異」などの諸項目の組み合わせから、そこに含意される内容を読み取るのは（専門家でなければ）容易ではないが、その意味内容のおお

よそをあえて一言に集約すれば、「社会的意味空間の分節化」という趣意になると考えられる。そのさい、「社会的意味空間」という概念中の「空間」という名詞は「世界」「領域」「基盤」などに置き換えることも可能であり、あるいは比喩的には「媒体・媒質（メディア）」「クラウド（雲）」と表現されてもよいかもしれない。

それでは、「社会的意味空間」とは何であろうか。それは極度に抽象的な概念に思えても、けっして非現実的なことがらではない。そもそも社会学が扱う主要な対象とは、その多くはきわめて日常的・現実的（プラグマティック）なことがらであり、「社会的意味空間」もまた、人びとが日常的に経験しているあたりまえの現実の側面をクローズアップしているにすぎないのである。

「社会的意味空間」に相当する意味内容は、これまでも学術的・思想的伝統において語りつづけられてきた。たとえば、「精神」（ヘーゲル）、「集合表象」（デュルケーム）、「世界3」（ポパー）、「文化システム」（パーソンズ）、「ノモス」（バーガー）、「共同幻想」（吉本隆明）、「世界の共同主観的存在構造」（廣松渉）、「社会空間」（ブルデュー）、「虚構（fiction）・想像上の秩序（the imagined order）」（ハラリ）、「（共有される）意味の場（Sinnfelder）」（ガブリエル）などの語彙の指示することからは、もちろん各々に異なるとはいえ、（批判を承知で）概括的には「社会的意味空間」にほぼ相当するたぐいのものと思われる。

一例をあげれば、歴史哲学者 Y.N. ハラリの近年の世界的ベストセラー『サピエンス全史』からの以下の引用文は、あたかもルーマン理論の核心をわかりやすく要約しているかのように思えてしまう。「歴史を動かす重大な要因の多くは、法律、貨幣、神々、国民といった共同主観的なものなのだ。」「共同主観的」なもの、多くの個人の主観的意識を結ぶコミュニケーション・ネットワークの中に存在する。<sup>6)</sup>

あるいは、最近話題の哲学者 M. ガブリエルの主著『なぜ世界は存在しないのか』に著されている思想は、明らかにルーマン理論をふまえているとみられる。たとえば、ガブリエルの主旨にあた

る「世界とは、すべての意味の場の意味の場、それ以外のいっさいの意味の場がそのなかに現象してくる意味の場<sup>7)</sup>」という記述について、「世界」を「社会」に置き換えれば、「社会とは、それ以外のいっさいの社会的意味(コミュニケーション)の場がそのなかに現象してくる社会的意味(コミュニケーション)の場」となり、まさしくルーマン理論に転じてしまう。しかも、ガブリエルはライプニッツ的モノイド観をふまえて、「世界」全体は把握することはできず、有意味なものごとは、各々区別される無数の「意味の場」において現象してくるものであるとする。この「区別される意味の場」こそは、ルーマン理論的には「社会システム」に相応するとみることできる。

「意味」といえば、かつてヴェーバーは社会学の方法論の基点として、行為者の内面において思念されている主観的意味を推量し、それを「目的-手段」カテゴリーにあてはめることをとおして、社会的現象の分析をこころみるというアプローチを提唱した。そのばあいの「主観的意味」を行為者の“内面”に位置する「意味」とすれば、ルーマン的な(社会的)「意味」とは、その主観的意味への視線を逆方向に転じて、行為者の“外部周界(周囲世界)”の意味論的(セマンティック)な空間・媒質を対象化したものといえる。そうした“周界の意味”に準拠した視界のもとでは、社会を生きる人びと(行為主体)は誰しも、なにがしかの意味空間(媒質)のなかにあって、その場(空間)に特有の「意味」内容を「体験」し参照しながら活動していることになる。

ヴェーバーやパーソンズが分析の中心にすえた「行為」概念に対して、ルーマン理論では「行為」以上に「体験」(Erleben)概念が重視されている。このばあいの「体験」とは、行為主体が置かれた意味的状况を行為の前提として受けとめている“被投的”状態にほかならない。諸狀況が構成される(いわば)「場」にあたる意味空間やその媒質が、多種多様な区別や差異の作用により分節化され自律的な諸領域として成立している状況こそが、人びとが行為にさいして「体験」しているさまざまな「社会システム」ということになる。

そのような社会的意味空間をめぐるのは、古来、哲学者や社会学者のみならず誰しもが日々各々に感得し言及しているが、それらの意味空間をあらためて対象として取り上げて分析的把握をこころみた本格的な考察はルーマン理論以外には稀有である。しかるに、21世紀の現実の社会では情報技術の進展にともない、社会的意味空間はグローバルにして、しかもサイバースペース的にも拡張され開発され重層的に深化して活用されており、それゆえ社会的とりわけ公共的な意味空間の分析的な把握はいっそう要請されるはずであり、そこにルーマン理論の視点が寄与する余地はあるとみられる。

だが、社会的意味空間を研究対象として扱うさいには、まず、その実在性や実証性をいかにして担保するのかという課題が生じてくる。ルーマン理論のばあい、その問題点に対しては、マクロ社会で実際に作動している周知の公共的な制度的機構として、法律・貨幣・学術などの機能分化した機能システムを取り上げて比較分析するアプローチにより対応しているとみてよい。ルーマン自身の約30年間におよぶ社会理論の考究では、そのアプローチが一貫して根幹にすえられている。すなわち、ルーマン理論に特有の「コード」「プログラム」「コミュニケーションメディア」「観察」という抽象的分析視点を、法システム、貨幣経済システム、学術システムなどの各機能システムに共通に適用するという比較分析の方法である。

ただし、この論法はごく一部の法哲学者・法社会学者には受容されているもの<sup>8)</sup>、その妥当性は、より広く共有されているわけではない。実際、そうしたルーマン流の方策は、法律・貨幣・学術などの諸領域における専門的認識を深化させるよりも、むしろ異種同型性(isomorphism)の概括的な比較により、それらのシステムの(いわば)“素材”となる社会的意味空間(コミュニケーション媒質)そのものを主題化し概観する側面にこそ意義があるといえる。すなわち、社会的意味空間(媒質)が社会的に進化し、法・貨幣経済・学術をはじめ親密性(情愛)・教育・マスメディアなどに至る機能分化システムが分出しているとみる

描像がもたらされるのである。

以上のように、社会学的もしくは社会科学の思考の基礎視角として、社会的意味の公共的空間の全般を想定して、その分節化のあり方に合わせて個々の「社会システム」を措定するという観点にこそ、ルーマン理論の格別な意義があると考えられる。この視角は、(ヴェーバー＝パーソンズ的な)行為主体の「行為」というユニットに分析的諸要素を詰め込むかたちではなく、行為主体が多様な「社会的意味の場」を「体験」(Erleben)して参照しながら活動し合っている様態の総体を対象にすえる視角にほかならない。それは、21世紀の高度に複雑な情報空間のもとでの「社会と人間」の把握に適合した基礎視角たりうと思われる。

だが、そうした観点の主張に対しては「当然のことゆえに無内容」とする批判があれば、「その局面に焦点をあて研究対象として主題化し、高度に一貫性のある理論的分析を駆使した学術研究事例は、ルーマン理論以外には皆無」と返答したい。

## (2) マクロ社会の意味論とマイクロ社会の相互作用モード

かつて日本の社会学界では、社会学の理論的立場を概括的に分類して「マルクス主義」「機能主義」そして「意味学派」とする見方があった<sup>9)</sup>。そのばあいの意味学派とはシンボリック相互作用論・現象学的社会学・エスノメソドロジーの総称であり、それらはまたマイクロ社会学とも称されていた。以上の類別においては、パーソンズ理論やルーマン理論は、マクロ社会のシステム論的比較分析(機能分化論)ゆえに、機能主義に属するものとされる。しかし実際には、ルーマン理論は「意味学派」でもあり、なおかつ「機能主義」でもあり、しかも「マクロ社会学」側に位置づけられるとみられる。「意味学派」と「機能主義」という異質であり対立するとされる両派に跨っている立ち位置にこそ、ルーマン理論の特異性があるといえる。

ルーマンは理論構想の当初から E. フッサールの現象学にも依拠していることを表明しており、また後年、J. デリダや G. ドゥルーズの「差異と

反復」などのポスト構造主義的・解釈学的思想にも関心を寄せていた<sup>10)</sup>。こうした意味論的なスタンスは、一般には機械や生物をモデルとする科学技術的な機能主義的・システム論的思考とは相いれず、まったく馴染まないものとされる。しかるにルーマン理論のきわだってユニークな点は、なによりも現象学的・解釈学的な相互主観的「意味空間」に「システムを描く」ことにこそあり、そのばあいには意味的な「差異」は「システム境界」に対応し、事象の「意味づけ」(意味解釈)は「機能分析」に対応することになる。一般には(あたかも水性と油性のような)異質な局面とされている「意味」と「システムの機能」の両極が、ルーマン的思考では融合されているのである。

その特有の思考法にもとづく社会観においては、社会的意味空間が差異化され分節化されることにより、「意味の場」にいわば(幾重もの波紋のような)“スペクトル”成分が生成され、そこから法・貨幣経済・学術・教育・マスメディアなどの機能的諸領域が輪郭づけられようになり、各領域がやがてシステムとして自律性を高めていくという様態が映し出されることになる。ルーマン理論が描く「社会」や「社会システム」とは、まさにそうした姿かたちのものにほかならない。「社会構造とセマンティックス(意味論)」(Gesellschaftsstruktur und Semantik)という論文集の表題<sup>11)</sup>も、そのことを表明しているといえる。

その独自の「社会システム」論に依拠して「社会」の理論の構築をめざしたルーマン理論は、おもに法・貨幣経済・学術などの公共的な制度的機構を分析対象とし、それらの自律性の高度化の進展に「社会」の「進化」の方向性を見だしていた点では、あきらかに「マクロ社会学」の部類に属している。その半面で、マクロ社会的機能システムに関連した具体的な諸作用をめぐっては、(ルーマン語で)「コミュニケーションメディア」と総称される「権力」「貨幣」「愛」「真理」などの一連の「人と人との相互作用」状況の行動様式の各種モードについて論究を重ねており、その点では「マイクロ社会学」的でもある。この着想の発端はパーソンズの提唱した「一般化されたシンボ

リックメディア」にあったが、機能システム間の相互交換関係を念頭に置いたパーソンズの学説とは異なり、「人と人との相互作用」状況の「複雑性を縮減」して水路づけ整序する機能として発達し進化した各種のモードたる「コミュニケーションメディア」という把握は、ルーマンに独自のものである。

とりわけ権力・貨幣・愛・真理という代表的な「媒体」（メディア）についてのルーマンの考察の基本線は、理論構想の初期から晩年までの約30年間にわたり、驚くほど変わらず一貫している。しかるに、それらの分析内容そのものは、あまりにも単純なかたちにパターン化されすぎており、現実の社会関係にどれほど対応しうるのか、あまりにも疑問の余地がありすぎるため、コミュニケーションメディアをめぐるルーマンの構想は成功しているとはいいがたい<sup>12)</sup>。とはいえ、「社会」の意味空間の分節状況が、諸行為主体の具体的な行動状況における各種の「区別」「線引き」「規制」「縮減」という様態を呈して作動していることは、人びとの社会生活の日常体験的な実感には即応しており、ヴェーバー的な「行為連関」、あるいはパーソンズ理論における「秩序問題」の解決策とされる「規範」の位置づけなどに比較して、それらの到達点をこえて、はるかに現代的なパースペクティブを提供しているといえる。

ルーマン的な「コミュニケーションメディア」の構想は、少なくとも着想としては今なお有意義であり、今後、新たな観点をくわえて、ひきつづき考究されることが期待される。

### (3) 差異の観察とシステム形成

「社会的意味空間の分節化」に関連していえば、ルーマン理論よりも、むしろ、ほぼ同時期に活躍したフランスの社会学者P.ブルデューの「界」(場)概念<sup>13)</sup>のほうが、はるかに社会科学実証性に適しているといえるかもしれない<sup>14)</sup>。「社会」のあり方を、差異の体系としての「社会空間」において、人びとが各自の“障地”とするなんらかの「界」(場)に属しつつ、互いに象徴闘争をくりひろげながら上昇・下降していく階層的様相として

とらえる見方は、直感的に理解しやすく実証的な調査研究にもつなげやすい。

ルーマンもブルデューもともに、「社会」をポストモダン思想的に「差異の体系」としてとらえる点では類似しているが、ブルデューは「システム」という概念の使用を避け、ルーマンは「階級」「闘争」という言葉で語ろうとはしなかった。前述の社会学理論の三分類にあてはめれば、両者は「マルクス主義」と「機能主義」という対立する立場を示す好例でもある。

ルーマンのばあいには、現象学に関心を寄せる一方で、(ブルデューとは異なり)ひたすら一般システム論やサイバネティクスの動向を追跡し、それらの分野から新たな知見を吸収して社会学の基礎理論の視角に導入することに腐心した。パーソンズに端を発するこのシステム理論的探究スタイルは、ルーマン没後四半世紀を経た今日でも、ひきつづき通用する研究スタイルであるとみられる。その路線のもとで、今日、社会システム概念を刷新するさいには、インターネット、AI、ブロックチェーン、自動運転、認証・識別、遺伝子操作、免疫システム、脳科学、量子テクノロジー、マルチメッセンジャー観測、等の21世紀的な科学技術の知見が参照されることになるであろう。

差異に関連して、ルーマン的な社会システム概念の基礎的論理には、数理論理学者G. スペンサー＝ブラウンによる「形式」(form)の考え方がある<sup>15)</sup>。スペンサー＝ブラウンによる「形式」の形成操作とは、要するに、なんらかの空間を線引きにより二分して、その片方の側を内側として選定し、ひきつづき、その内側の領域において線引きによる区分を繰り返すという一連の操作からなる形態形成の過程といえる。一見、『創世記』冒頭の神による世界創造や、あるいは(ルーマン自身も「システム」の表現形態として関心を寄せた)ドゥルーズ的な「差異と反復」を連想させるプロセスでもある。だが実は、この「形式」の抽象的な操作プロセスのはたしてどこに、システム概念を基礎づける着想があるのかについて、ルーマン自身の真意のほどは(専門的研究者でも)容易には把握しがたい。

スペンサー＝ブラウンは、論述にさいして、まずは白紙状態の空間に線引きをして、(選択された)片側の方向に短い直線を「鉤型」になるように付け足している。この手順について、(筆者なりに)わかりやすく説明し直すならば、まず、(一般に)「集合」を表記する「ペン図」のような「円」を描き<sup>16)</sup>、その内側にさらに「円」の書き込みを反復すればよいであろう。そうした「円」の書き込みが意味することは、その手続きの繰り返しもともない、しだいに内側の領域が(意識されて)整序・強化され、また「円」の境界部分も再確認・更新され、くわえて内側において観察に特化したセクター(セカンドオーダーの観察視点)さえ形成されるようになるという、そうした一連のプロセスの表現であるとみられる。この「円」(もしくは「輪」)の内側の空間を(筆者なりに)「領域」(sphere)と名づければ、その「結界」のような「領域」こそが、ルーマン的な意味での「システム」の原型にほかならない。

スペンサー＝ブラウンの学説の参照により、なんらかの「領域」にかかわることがらの(第一次的)把握(観察)にはつねに、「領域」以外の周界(周囲世界)との「差異」(区別)について確認する(第二次的)観察視点が随伴しているとする、二層の「観察」という着想が得られる。それこそが、ルーマンがスペンサー＝ブラウンの学説に着目して自身の理論の補強に活用した主旨にあたとみてよい。この考え方に依拠すれば、社会において遂行される無数の作用・作動・操作・認識・行動の“重ね合わせ”をとおして「領域」の境界が確認されつつ各種の社会システムが形成され更新されていく様態が描出されることになり、そのようにしてシステムの自律的な形態形成の基礎イメージが概念化されるというわけである。

以上のような抽象概念的なプロセスの意味内容については、はたしてどれだけの人びとが了解しうるのかという疑念は残るにしても、少なくとも、さまざまな種類のシステム(領域)について、各々のシステムの内側からの(なにがしかの)「境界観察」作用を想定しうることは、広く通用する一般的な基礎的視角として成り立ちうると思われ

る。実際、人びとの日常的な意識・思考・行動においても、また社会的現象や問題状況においても、なんらかの「領域」の内側から「境界面」を「観察」して把握し対処するといった活動形態はいたるところにおびただしく見いだせるからである。

要するに、「観察作動(作用)」の在るところに「観察視点」が在り、そこに「システム」が形成されている、ということにほかならない。一般システム論的な例示としては、(新型コロナ禍であらためて世界的に注目を集めた)生体の免疫システムにも類似した「観察」形態がみられるということであろう。その種の内側からの観察視角を重視する理論的立場は、(ルーマン理論と哲学者ガブリエルの思想に共通する)ライプニッツ的「モノアド」論の現代版といえるかもしれない。

「観察」(observation, Beobachtung)は、ルーマン理論の根幹に位置する最重要項目だが、ただし、日本語の「観察」の用法では「観る」側面がもっぱら重視されるのに対して、西洋語では「規約の遵守」「維持」「観察にもとづく陳述」なども含意されており、ルーマン理論の「観察」も広義のものともみるべきである。結局のところ、「観察」とは、社会システムのばあいにも、人びとの「意識の向け方」、現象学的に言えば「志向性」や「気遣い」に起因する作動であるとみられる。

通例、社会システムは、「人びとの集まり」「つながり」に関連して「集団」「組織」「社会的ネットワーク」として、また「行為システム」「役割システム」として、あるいは「社会的意味空間」の「領域区分」の複合体としてとらえられることが多い。それに対して、スペンサー＝ブラウンの「形式」理論の参照により補強されたルーマン的システムの「観察」の観点は、それらの旧来の視角を大幅に刷新する可能性を秘めている。「観察作動」を基軸とする新たな社会システム概念は、社会生活の場で日常的に交わされる言明・記述や確認行動などの無数の諸作用(作動)を介して形成・更新・進化・消滅する多種多様な社会システムの姿かたちをとらえる基礎視角として注目され、その活用が期待されるのである。

### 3. ルーマン理論の難点

(前章で要約的に陳述したとおり) ルーマン理論の意義について、その要諦とは、なによりもまず、「社会」の認識にさいしては、「社会的意味空間」および(その)「分節化」の把握が決定的に重要であるととらえ、そのあり方を考察するために、「(社会的) 差異を観察する作用(作動)」により「境界を形成・維持・更新するシステム」としての「社会システム」を想定し、それを主題化して分析するというアプローチを提唱した点にこそある。この理論の方針に即して、社会システム概念を刷新する基礎視角がもたらされることになる。

しかしながら、そのような基礎視角から社会科学に有効な社会システム概念を導出するさいには、そうした実証的・経験的な展開の可能性を阻むルーマン理論に固有のいくつかの難点が存在する。ここでは、その障害を以下のような五つの側面において論じることにした。

- (1) コミュニケーション概念の特異性
- (2) オートポイエシスへのこだわり
- (3) 機能分化の偏重
- (4) 過剰な反-人間主義
- (5) 西ヨーロッパ近代主義の限界

#### (1) コミュニケーション概念の特異性

1980年代～90年代に日本の学界にルーマン理論が紹介され浸透したさいに、この理論の主要な術語である「コミュニケーション」をめぐる特有の疑問や期待がいだかれた。その疑問とは、「社会はコミュニケーションから成り立つ」という(この理論の核心にあたる)命題の趣旨をいかに理解するかという謎であり、期待とは、この理論から(多くの人びとが関心をいどく)「対人的コミュニケーション」について斬新な視角や具体的ヒントが得られるのではないかという期待感であった。結果的には、その疑問への解決は曖昧なままにとどまり、期待感は消失するに至った。

ルーマン理論の読解では、この種の疑念や齟齬は頻繁に発生しがちである。というのは、使用さ

れる術語や概念の用法が通常とはかなり異なるうえに、読者の受け取り方にあまりに無頓着な論述が重ねられ、丁寧な説明など稀有だからである。一例として、この理論の主要な項目とされる「コミュニケーションメディア」についても、その名称はけっして適切なものとはいえない(パーソンズのばあいには、「一般化されたシンボリックメディア」)。この用語の通常使用においては、当然、「マスメディア」もしくは「通信機材」あるいはまた「手話」等の会話の伝達手法などが思い浮かぶ。「コミュニケーションメディア」という術語から、「権力」「貨幣」「愛」「真理」の作用を思い起こすことには無理がともなうのである。

とりわけ現代日本語の文脈で「コミュニケーション」というばあいには、暗黙の前提として、身近な人間関係、態度、接し方、自己の表現、話し方、あるいは組織内の報告・連絡・相談などが含意され期待される。しかるに、ルーマン理論で語られる「コミュニケーション」は、そうした身近な対人関係や業務上の表現のたぐいとは明らかに異なっている。したがって、日本人の通常の読解では、ルーマン理論は理解しがたい。

ルーマン自身は「コミュニケーション」概念についてたびたび解説してはいるが、「コミュニケーションとは、情報・伝達・理解の三契機の組み合わせからなる」という記述以上の説明をしていない。この三契機とは、従来の通信理論的なコミュニケーションの概念に含意される「送信」「伝達手段」「受信・受容」という三契機をふまえたものとみなせば、常識的な範囲の定義ともとれるが、しかるに、ルーマン自身は、「受容」ではなく「理解」(Verstehen, understand)であることを強調している。

この「理解」という概念こそが重要なのである。その意味内容を解釈すれば、ルーマンのいう「コミュニケーション」とは、「新たな報せ」(情報)が「伝達」により「了解事項」(理解)化される状況にほかならない。「了解」される「事項」は、そのまま「受容」されるのではなく(「了解」されても「受容」されるわけではない)、あくまで「差異」(区別)に依拠した「観察」という選択的作



動を駆動させるのであり、ルーマン理論的には、その作動の継続という機能的なプロセスこそが肝要となる。あくまで「了解事項化」およびその更新と利用であり、構成員全員の「受容」や「合意」は不必要になる。たしかにそれも「社会」の冷然たる現実であるといえるかもしれない。

そのような「了解事項化」としての「コミュニケーション」とは、より具体的な場面では、法令や規約の改正（法システム）、貨幣の授受を介した価値水準の了解（貨幣経済システム）、認識・知識の共有（学術・マスメディアのシステム）などにあたるといえる。要するに、「社会を成り立たせている意味基盤の共有」という現象や状況にほかならず、たしかにルーマンは、そうした社会秩序の基盤（いわば「近代社会の公共的プラットフォーム」）を考究しつづけたのである。そうしてみると、ルーマン理論の中心的命題である「社会はコミュニケーションから成り立つ」という“謎めいた”文言の意味内容もかなり素直に理解されるであろう。

また、ルーマンは語源に遡及した独自の解釈をくわえることがあり、「コミュニケーション」についても、古代ギリシア語の「共同体」(koinonia)のラテン語訳としての二種類の訳語「ソキエタス」(societas)と「コムニタス」(communitas)のニュアンスの微妙な差異が念頭にあったのかもしれない。そうであれば、「社会」と「コミュニケーション」の語義の差異が使い分けられ、「社会はコミュニケーションから成り立つ」というレトリックを加味した表現も理解されやすくなる。

## (2) オートポイエーシスへのこだわり

「オートポイエーシス」(autopoiesis)は、生物学者のH. マトゥラーナとF. ヴァレラが編み出した生物システムの自律性についての画期的な概念・理論であるが、まったく異分野の文系のルーマンの著作をとおして広く世界的に知られるようになった。ルーマン自身は、実際にマトゥラーナとヴァレラとの共同研究の機会を設けたものの、結果的には、「神経システム・細胞生成・免疫システム等にかかわる理系の生命科学」と「法令・(貨

幣を介した)取引・行政組織等にかかわる文系の社会科学」とのあまりの懸隔を埋め合わせることはできなかった模様である。生命科学の領域でも「オートポイエーシス」は、いまだに奇抜なアイデアとして参照されても、広く認証されるには至っておらず、(ポストモダン思想嗜好の)ごく一部の理系人の関心を惹くにすぎない状況である。ただし、理系科学的には不確定な学説ではあっても、現象学的・解釈学的な文系の言説領野では「イメージとしては活用可能」という意義はあるかもしれない。

過去40年間、ルーマンの語る「オートポイエーシス」には少なからぬ期待感がいだかれたが、その半面で「理解不能・矛盾・曖昧」といった疑念・批判・期待はずれ等も百出してきた。そもそも、ルーマン理論を「アルゴリズム的に厳密な論理的プロセスからなる理論体系」と考えるにはあまりにも無理がある。実状に即していえば、むしろ、本来的に別次元の諸学説を集めて(ルーマン流に)類似するイメージを投影させるという、それらのイメージの重ね技の論法にこそ、ルーマン的な「オートポイエーシス的システム」の趣向や意義があるとみるべきであろう。

すなわち、第一に、現象学に由来する顕在的な「図」(フォルム:かたち)と潜在的な地平としての「地」(メディア:背景となる素材)。第二に、スペンサー=ブラウンの「形式の法則」に由来する「差異」にもとづく“囲い”の内側と外側の区別および内側からの境界観察作動。第三に、生物学のオートポイエーシス学説に由来する自律的な自己構成および認識の閉鎖的システム。以上の複数のイメージの重ね合わせにより、ルーマン的な「システム」概念がもたらされているのである。

それゆえに当然、厳密な論理展開などは期待できない。それでも、現代において「社会」について考え、そのさいに「システム」を想定し措定するばあいには、それなりに有効な視角や視界を提供しうる可能性はある。とはいえ、本来の生物系オートポイエーシス学説の遵守に固執するならば、以上の斬新なシステム概念の適用範囲を著しく狭めてしまうことになる。

もとより、ルーマンの理論構築の起点のひとつは法律システムの研究（法社会学）にあった。たしかに、法の条文・判決・判例などを諸要素としたネットワークのしくみを対象とするならば、(文系的感性においては) 近似的・類比的に「オートポイエーシスのシステム」とみなすことはできるかもしれない。実際、法学者 G. トイプナーはルーマン理論に依拠した独自の学説を主張しており<sup>17)</sup>、法哲学・法社会学分野ではある程度は評価されている。

また、貨幣を介した決済の機構（貨幣経済システム）、あるいは科学的な真理性が担保された命題群の参照体系（学術システム）についても、近似的なオートポイエーシスを想定しうるかもしれない。しかし、それら以外の多種多様な社会システムとなると、各システムを構成する諸要素の「同質性」を設定するには、どうしても無理が生じる。つまり、オートポイエーシスのシステムを指定するさいの要件となるような、たとえば、条文・判例（法システム）、取引履歴（貨幣経済システム）、科学的命題（学術システム）に相当するような社会システムの構成要素の同質性の確保が困難になるのである。

現実のさまざまな種類の社会システムを対象とするばあいには、「システムが構成する自らの諸要素のネットワークとして当該システムそれ自体が成り立つ」という「要素とシステムのオートポイエーシス的な構成連関」に付随する同質性の規準を緩和して、(シンボルから人員・物財に至る) 雑多な諸要素の複合体としてのシステム像を描くことが、どうしても必要になる。

### (3) 機能分化の偏重

「社会」の分化と歴史的進化について、ルーマン理論には初期から晩年に至るまで特有の見方が一貫していた。それは、「環節分化」から「階層分化」へ、そして「機能分化」へという分化形態の発展の三段階図式である。さらに「中心と周辺との分化」の項目を追加して、環節分化→中心と周辺との分化→階層分化→機能分化という推移も考えられた<sup>18)</sup>。この図式を文明論的な構図にあて

はめれば、部族社会に典型的な「環節分化」、古代文明に関連する「中心と周辺の分化」、古代から中世にかけての身分制社会に顕著な「階層分化」、そして近現代社会に特有の「機能分化」ということになる。

以上の図式的把握は、極度に単純化された文明論的發展段階の構図としては手軽でわかりやすいものの、近現代社会に関して機能分化のみを過度に強調するルーマン自身の主張には、どうしても疑問が生じる。というのは、社会学が研究対象としている現実の社会は、本来的に雑多な要素や過程からなるきわめて複雑な複合体であるからにはほかならない。たとえ、近現代社会といえども、「機能分化」のみならず「環節分化」や「階層分化」の側面も多分に内在しつつおき、それら構造分化の各局面を混合させて把握することは、いまだに有効であり肝要である。経済学的・経営学的・政治学的にみても、いまなお「社会」を、家族・団体・企業・国家などの「環節的分化」からなる集合体という観点でとらえることは必須であり、さらには、近現代社会では身分制的な構造は緩和されていても、富の格差拡大にともなう「階層分化」は最近でも肝要な社会問題でありつづけている。

旧フランクフルト学派の面々と同様に、ルーマン自身も、社会科学者であるよりも哲学的なスタンスに指向していたとすれば、現実社会の把握にさいしても理想化傾向がきわだつことはいかぬのだが、それでは、社会科学の理論としての値打ちを大幅に減価させる帰結をもたらしてしまう。「社会」や「社会システム」の理論であるならば、近現代社会に関して、当然、環節分化・階層分化・機能分化の混在する状況を想定するべきであろう。

### (4) 過剰な反-人間主義

近年、二冊のルーマン理論解説書を公刊しているヘーゲル哲学研究者 H.-G. メラーは、ルーマンの評価されるべき側面として「ラディカルな反(アンチ)ヒューマニスト」「ヒューマニズムの拒絶」を強調している<sup>19)</sup>。たしかにルーマン自身も、

理論構築の方針として、「ラディカルに反人間主義的で、ラディカルに反領域主義的で、ラディカルに構成主義的な社会概念への移行」の企てであると主張している<sup>20)</sup>。

この方針は、社会学の主流にもなっている「諸個人の意図や属性に遡及する行為理論的な見方」や「諸個人の相互作用の機微を重視するマイクロ社会学的な観点」に対するアンチテーゼにほかならない。20世紀の哲学思想にたとえば、実存主義に対比される構造主義やポスト構造主義の立場に相当するともいえる。

ルーマンからみれば、社会をめぐる多くの議論や分析には、諸個人の主観・属性・行動、さらには倫理や理念などを、あまりにもナイーブに仮定した人間主義（ヒューマンイズム）的言説が満ち溢れている。それらに依拠するかぎり、現代の巨大で過度に複雑な「社会」を把握することはできない。だからこそ、その立場とは対極に位置する「非-人間主義」「脱-人間主義」的な理論の提出をめざして、機能主義やシステム理論の諸学説を駆使し考究することをとおして、新たな理論を構築するというライフワークに専心したのであった。その結果、ルーマン理論は、社会科学や現代思想の領域における人間主義的バイアスに対して、一種の“冷却材”ともいえる反省の契機をもたらすことになった。その意義ゆえに、今日、世界中から（ごく一部とはいえ）研究者たちがルーマン理論にアクセスし参照しつづけているのである。

とはいえ、哲学的思想の主張ならば、より先鋭化された論点の明示は肝要であるとしても、社会学的研究では、もとより、人間活動の雑多な諸要素の複合体としての「社会」を把握し分析することが第一義となる。たとえば社会調査の現場では、多様な背景をもつ具体的な人格の内面や諸特性を推量し参照し尊重しつつ、そこからデータを作成して「社会」の分析に役立てようとする。そうしてみると、ルーマン的な反-人間主義的で哲学思想家的スタンスは、あまりにも現実から乖離しているといわざるをえない<sup>21)</sup>。

実際、社会学研究者の多くは、むしろ“冷たい制度的機構”に関して、そこに人間固有の関係

的・感情的・恣意的な“ゆらぎ”を見だし重視することに関心をいだいている。また、ルーマンの念頭にあった法令・貨幣経済・学術の諸機構においても、けっして機能システム的な純粹作動とはいえない“私的”な故意や恣意性や勢力抗争などの諸要因が関与する実状も散見される。そもそも「社会的意味」「コミュニケーション」とはいえ、そのメッセージ内容の解釈それ自体、現実の人びとの介在により微妙に揺らいでいる。

社会学理論の伝統には、パーソンズ以降、「行為」と「構造」という基軸となる視角がある。それは、主観的な表象をいだきつつも能力的に制約された行為者たちが、社会状況的・制度的な「枠組み」（フレームワーク）のもとで社会的行為を遂行しているとする社会学的人間像にあたる。あるいは、現代思想系の用語でいえば「実存主義」と「構造主義」の混在でもあり、現代社会学の術語でいえば「構成主義」と「機能主義」とを混合（mixed）した図式や基本視角ということになる。

そうしてみると、（先述の）哲学者メラーが主張する「ラディカル・ルーマン」ではなく、社会学的にはむしろ逆に（メラーの批判する）「薄めのルーマン（Luhmann lite）」「弱いポスト・ヒューマンイズム（weak posthumanism）」<sup>22)</sup>こそが肝要なのであり、「行為」と「構造」（システム）の両局面を組み合わせ混合した（社会学の伝統的な）視角の地平においてこそ、ルーマン理論は活かされるべきであろう。

## (5) 西ヨーロッパ近代主義の限界

2020年代の今日に即した社会学的な立場からすれば、ルーマン理論の歴史的参照点ともいえる「近代社会の起点としての1800年」という観点は、もはや時代遅れの感が否めない。同様のことは、ルーマンにかぎらず、今日なお重視されているM. フーコーやJ. ハーバーマスの著述内容にも共通しており、それはヨーロッパ知識人的な古典教養に特有の制約なのかもしれない。古典古代・ルネッサンス・啓蒙主義・ロマン主義の伝統を継承する立ち位置からの近現代社会に対する批評的視角の設定は、たしかに古典教養としては世界中の

教育課程で今なお尊重されているが、今日のグローバル化、デジタル空間、データサイエンス、さらには、中国の台頭や東南アジア・インド・イスラーム地域の存在感の高まりを考慮すれば、もはや社会科学的な観察視角にとっては「盲点」(blind spots)の最たる元凶になっているといえよう。

くわえて、ビジネスやポピュラー文化を軽視する伝統的姿勢は、現代のドイツやフランスの哲学思想系や社会学理論系の言説においてもきわだっている。また、そうした文化エリート主義的な時代遅れを学術システムの評価機構が助長していると思われる(ルーマンの「芸術システム論」にもその傾向は顕著にみられる<sup>23)</sup>。

もちろん、インターネットの普及も、9.11も、中国の台頭も、ナショナリズムの復活も知ることなく20世紀末に没した理論家の故人を責めることはできない。今日、西洋古典主義的偏向を緩和し多少なりとも矯正するためには、他方の極限に、西ヨーロッパの伝統に由来する自由・基本的人権・民主主義などの価値理念を軽視しつつ、人口規模・経済力・技術力・軍事力・戦略力で他国を圧倒して世界の覇権を握りつつある中国社会を位置づけ、それら両極間の(幅のある)スペクトラムとして現代の先進社会のあり方を分析し考察する視角が必要となる。それこそが、20世紀後半的ではなく21世紀前半的な「ポストモダン」の観点としてめざされるべきであろう。

#### 4. ルーマン的社会システム概念の プラグマティックな拡張

「社会」を対象化し、いかなる視角から、いかにとらえるのか。そうした「社会観」をめぐる切り口や糸口には唯一の解答などはなく、本来的に多様でありうると考えられる。ルーマンのばあいは、とりわけ「社会的意味空間の差異」に着目し、その「分節化」のあり方を個々の社会システムに特有の「境界」形成とみなし、その見方を独自の社会システム理論および社会理論として彫琢しつづけた。この視角を補強するためにこそ、機能主

義社会学理論、一般システム論、サイバネティクス、現象学、「形式の法則」、オートポイエーシス学説、ポストモダン思想の差異論などの諸観点が参照され折衷的に重ね合わされたのである。

そうして編み出された独自の社会システム概念は、2020年代の今日でも、「社会」について考察し分析するさいには、いまなお活用されるべき新鮮な視野を提供していると思われる。それは「社会」の姿かたちを、生物有機体や機械装置や行為連関やネットワークなどのイメージによってではなく、意味空間に「線引きする」区別の作動(作用・操作)としてとらえる提案であった。こうした「線引き」による区別はたえず繰り返され、それらの作動をとおしてシステム境界が形成されシステム構造が構築されることになる。このような「線引き」による境界形成と境界観察の作動なるものは、現実の社会では、さまざまな評価・チェックや各種の行動による介入・参入などのかたちを取って営まれており、日常生活における構成員の確認や取引契約をはじめ、サイバーセキュリティ、国境の管理・防衛、さらにはプラネタリーディフェンスなどに至るまで、マイクロからマクロなレベルにわたり、たしかに無数かつ多様なかたちで限りなく遂行されている。

「社会」を構成するシステムの各々の姿かたちは、人びとの認識や行動をとおして、たえずチェックされ反省され確認され、そして更新され変革されていく。ルーマンがとりわけ強調した「オートポイエーシス」とは、そのようなチェック機構が純粋に作動し、とりわけ均質化された作動要素が自己言及的に円環的に完結して、人為性や恣意性を超越するまでに完成された極限的なシステム構造の理想型にほかならない。現実にもそのような純粋型のオートポイエーシス的社会システムが存在するとは思われないが、(ヨーロッパの学術伝統に位置する)ルーマン自身は、法システム、貨幣経済システム、学術システムなどには、その理想的な近似型がみられると考えたかったのであろう。

たしかに、第二次世界大戦にみられる国家的暴力の恣意的な暴走による極大規模の悲劇を反省

し、EUに象徴される機能システム形成に依拠した平和的な広域地域社会の構築をめざすべき理想とするならば、ルーマン的な思索の道筋を歩むことには共感できる側面もある。しかしながら、オートポイエーシスを純粋に備えた極限型を想定する姿勢は、社会システムのイメージづくりの一環としてならばともかく、そのまま現実の社会や社会システムのあり方であるとして誤認するならば、せっかくの斬新な観点の現実的な活用の可能性を閉ざしてしまうがゆえに、それに対しては批判的にならざるをえない。

ルーマン理論の研究者であり、しかも実証的な社会システムとの関連も探求しているC. ボルフは、ルーマン理論の「盲点」(blind spots)を以下に要約する六点について指摘している<sup>24)</sup>。

- ① (物理的・地理的) 空間性の欠如。
- ② 個々の社会システムにおけるオートポイエーシスの作動要素は、現実には複数タイプあるはずのところ、唯一のタイプのみとされている。(→(本稿の)「オートポイエーシスへのこだわり」に関連する指摘)
- ③ システム内部のみが論じられており、環境との関係やシステム間関係については軽視されている。
- ④ 区別のコードについて二値的論理のみが強調されているが、現実には強度のグラデーションやスペクトラムが考慮されるべきである。(→システム境界はフリップフロップではなくファジーな様相を呈する可能性もあるという指摘)
- ⑤ 人間のいまだ「感情」の側面が無視されている。近年の社会学的研究では、「感情」をたんなる個人的現象としてではなく社会的現象としても重視する傾向にある。
- ⑥ 「社会」や「社会システム」を「コミュニケーション」としてのみとらえているために、物理的・地理的な空間性をはじめとして、そもそも「物質性」が完全に無視され欠落している。

以上、ボルフの指摘する六点については、まったく同意できる(②は本稿で前述した「オートポイエーシスへのこだわり」に相当する指摘とみられる)。

ルーマン理論は徹頭徹尾、物理的・地理的空間性からも、また道具・装置・行動・労働・資産・資源などの物質性からも距離を置いた「コミュニケーション」という名の「社会的意味空間」のみを対象として思考を展開している。その姿勢はルーマン自身に固有の資質のみならず、20世紀後半の西ドイツの学界で権威とされたフランクフルト学派系のドイツ観念論的な言説文化の伝統のもとで、反実証主義的な討議の場裡に身を置いたことにも起因するのかもしれない。メラーが指摘<sup>25)</sup>するように、ルーマン理論の難解な概念や論述はフランクフルト学派の言説様式に即応するべく設定されていたともみられる。そうであれば、ルーマンとハーバーマスとは、主張の対立よりもむしろ補完的關係としても位置づけられるのかもしれない。

とはいえ、哲学思想としてではなく、今日の社会科学の立場では、「社会」や社会システムを考察するばあいには、観念的な意味空間の次元のみならず、領域性や地域性を備え、人員の資質・欲求・配置、多種多様な物質的資源・資産・装置・物流、知的戦略能力の差異、さらにはシステム相互の協調・抗争・階層化などの諸局面を、当然、包含したかたちの社会システム論の言説空間を提供すべきことは必須である。ルーマン自身は機能システム論を主張するために「国家」「企業(経営体)」「家族」などの環節的社会集団をできるだけ理論から排除したかったとみられるが、それらを各々に社会システムとして扱うことは、2020年代の今日でも、日常的にも社会科学にも不可欠な設定であり最重要な要請でありつづけている。

以上の評価をふまえれば、「ルーマンの社会システム理論の構想はそもそも無効」と判定する向きもあるかもしれない。しかるに、ルーマンの思索の戦略方針とは逆の方向で、社会システムを人員的・物質的・行為的な諸局面から組み上げていく理論構想の道筋には予想以上に困難がともなうのである。

だからこそ、ルーマン理論的戦略に依拠して、なによりもまず「観察作動」に着目し、「観察作

動の在るところに観察視点が在り、システムが在る」とする観点は、広汎に有効なものになりうるのである。その視界のもとでは、今日話題になっている、デジタル空間の開発やセキュリティー、ブロックチェーン、暗号資産、中国型監視社会などの事象・現象も社会システム論的な言説空間に投影させることができるであろう。ただし、ルーマン理論それ自体のように、法システムをモデルにしたオートポイエーシスの機能システムに偏向するならば、理論としての現実的・実証的展開の可能性をあまりにも狭めてしまうことになる。

パーソンズ的「統合」、フランクフルト学派的「批判」、フーコー的「監視」、ブルデュー的「象徴闘争」など、それぞれの観点の意義をふまえたうえで、ルーマン的「観察作動」にもとづく社会システム概念を構想することは、今日的にきわめて有意義であると思われる。

それゆえにこそ、現代的な社会システム概念を提供するためには、ルーマン理論的な「観察作動型システム」のモデルに依拠しつつも、術学的な“ルーマン理論原理主義”に陥ることなく、むしろ（ボルフも指摘するような）ルーマン流の「折衷主義」<sup>26)</sup>の精神を活かして、そのシステムモデルを「プラグマティックに拡張」するべきであると考える。

注

- 1) 村田裕志「解釈学的-社会システム論としてのルーマン理論」、『社会イノベーション研究』第10巻-1号、2015年、185～240頁）、第2章「社会学系-社会システム論の諸局面」、185～239頁、参照。
- 2) Ref., C. Baraldi, G. Corsi, E. Esposito, *GLU-Glossar zu Niklas Luhmanns Theorie Sozialer Systeme*, Frankfurt am Main, 1997(Suhrkamp). (バルルディ・コルシ・エスポジト『GLU—ニクラス・ルーマン社会システム理論用語集』(土方・庄司・毛利、訳)、2013年、国文社)、参照。  
Ref., O. Jahraus, A. Nassehi, u.a. [Hrsg.], *Luhmann-Handbuch: Leben-Werk-Wirkung*, Stuttgart, 2012 (J.B.Metzler), Kap. IV “Begriffe”.
- 3) Ref., H.-G. Moeller, *The Radical Luhmann*, New York, 2012 (Columbia University Press), pp.3-4, p.136. (メラ『ラディカル・ルーマン：必然性の哲学から偶有性の理論へ』(吉澤訳)、2018年、新曜社、18～19頁、210～211頁)、参照。
- 4) 村田「解釈学的-社会システム論としてのルーマン理論」、

- 参照。
- 5) Ref., J. Habermas, N.Luhmann, *Theorie-Diskussion: Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie-Was leistet die Systemforschung?*, Frankfurt am Main, 1971 (Suhrkamp). (ハーバーマス・ルーマン『ハーバーマス／ルーマン論争 批判理論と社会システム理論』(佐藤・山口・藤沢、共訳)、1987年、木鐸社)。  
N. Luhmann, *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Frankfurt am Main, 1984 (Suhrkamp). (ルーマン『社会システム理論(上・下)』(佐藤、監訳)、1993-95年、恒星社厚生閣、ルーマン『社会システム:或る普遍的理論の要綱(上・下)』(馬場訳)、2020年、勁草書房)。  
N. Luhmann, *Die Gesellschaft der Gesellschaft* 1-2, Frankfurt am Main, 1997 (Suhrkamp). (ルーマン『社会の社会(1・2)』(馬場・赤堀・菅原・高橋、共訳)、2009年、法政大学出版局)。  
N. Luhmann (Baecker Hrsg.), *Einführung in die Systemtheorie*, Heidelberg, 2002 (Carl Auer). (ルーマン(ベッカー編)『システム理論入門—ニクラス・ルーマン講義録[1]』(土方、監訳)、2007年、新泉社)。  
N. Luhmann (Backer Hrsg.), *Einführung in die Theorie der Gesellschaft*, Heidelberg, 2005 (Carl Auer). (ルーマン(ベッカー編)『社会理論入門—ニクラス・ルーマン講義録[2]』(土方、監訳)、2009年、新泉社)。以上の文献を参照。
  - 6) Y.N. Harari, *Sapiens: A Brief History of Humankind*, London, 2011(2014, Vintage Books), p.132. (ハラリ『サピエンス全史—文明の構造と人類の幸福(上)』(柴田訳)、2016年、河出書房新社、152頁)。
  - 7) M. Gabriel, *Warum es die Welt nicht gibt?*, Berlin, 2013 (2015, Ullstein), p.97. (ガブリエル『なぜ世界は存在しないのか』(清水訳)、2018年、講談社、109頁)。
  - 8) Ref., G. Teubner, *Recht als autopietsches System*, Frankfurt am Main, 1989 (Suhrkamp). (トイブナー『オートポイエーシス・システムとしての法』(土方、野崎、共訳)、1994年、未來社)、参照。  
M. King, C. Thornhill, *Niklas Luhmann's Theory of Politics and Law*, Hampshire, 2005 (Palgrave Macmillan)。
  - 9) 吉田民人『主体性と所有構造の理論』、1991年、東京大学出版会、161頁、参照。
  - 10) Ref., Jahraus, Nassehi, *Luhmann-Handbuch*, pp.73-75.
  - 11) N. Luhmann, *Gesellschaftsstruktur und Semantik; Studien zur Wissenssoziologie der modernen Gesellschaft*, 1-4, Frankfurt am Main, 1980-1995.
  - 12) ルーマン理論にマクロ社会学の指針を見いだそうとしているチェコの社会学者イジー・シュプレトも同様の見解である。Ref., J. Šubr, *The Systemic Approach in Sociology and Niklas Luhmann: Expectations, Discussions, Doubts*, Bingley, 2020 (Emerald Publishing), p.107.
  - 13) Ref., P.Bourdieu, *La Distinction; Critique Sociale du*

- Jugement*, 1979, Paris (Minuit). (ブルデュー『ディスタンクシオン [I]』(石井訳, 1989年, 新評論), 参照。
- 14) Ref., J. Šubr, *The Systemic Approach in Sociology and Niklas Luhmann*, p.93.
- 15) Ref., G. Spencer-Brown, *Laws of Form*, 1969, London (George Allen and Unwin). (スペンサー = ブラウン『形式の法則』(山口監修, 大澤・宮台, 共訳), 1987年, 朝日出版社), 参照。  
N. Luhmann, *Einführung in die Systemtheorie*, chap.2, pp.66-91. (ルーマン『システム理論入門』, 第2章, 70 ~ 98頁), 参照。  
C. Borch, *Niklas Luhmann*, New York, 2011 (Routledge), chap.3, pp.50-65. (ボルフ『ニクラス・ルーマン入門: 社会システム理論とは何か』(庄司訳), 2014年, 新泉社, 第3章, 113 ~ 145頁)。  
D. Seidl, *Organisational Identity and Self-Transformation: An Autopoietic Perspective*, Hants, 2005 (Ashgate Publishing), pp.24-34.
- 16) 経営学者 D. ザイドルも「円」(circle) を使用して説明している。  
Seidl, *Organisational Identity and Self-Transformation*, p.25.
- 17) 上記の「注8」を参照。
- 18) Luhmann, *Die Gesellschaft der Gesellschaft 2*, p.613. (ルーマン『社会の社会 2』, 907 ~ 908頁)。
- 19) Moeller, *The Radical Luhmann*, chap.3, pp.38-57. (メラー『ラディカル・ルーマン』, 第3章, 38 ~ 57頁)。  
Ref., H.-G. Moeller, *Luhmann Explained; From Souls to Systems*, Chicago, 2006 (Open Court).
- 20) Luhmann, *Die Gesellschaft der Gesellschaft 1*, pp.34-35. (ルーマン『社会の社会 1』, 22頁)。
- 21) メディア論の社会学者クリスティアン・フックスも同様のルーマン批判をしている。  
C. Fuchs, *Internet and Society; Social Theory and the Information Age*, New York, 2008 (Routledge), pp.35-40.
- 22) Moeller, *The Radical Luhmann*, pp.20-21. (メラー『ラディカル・ルーマン』, 40頁)。
- 23) Ref., N. Luhmann, *Die Kunst der Gesellschaft*, Frankfurt am Main, 1995 (Suhrkamp). (ルーマン『社会の芸術』(馬場訳), 2004年, 法政大学出版局), 参照。
- 24) Borch, *Niklas Luhmann*, pp.137-140. (ボルフ『ニクラス・ルーマン入門』, 292 ~ 298頁)。
- 25) Moeller, *The Radical Luhmann*, p.15. (メラー『ラディカル・ルーマン』, 35 ~ 36頁)。
- 26) Borch, *Niklas Luhmann*, p.140. (ボルフ『ニクラス・ルーマン入門』, 298頁)。

#### 付記

本稿は、成城大学経済研究所の第1部研究プロジェクト「グローバルヒストリー再考：文明からみる世界経済史」(2018 ~ 2020年度)、「対立」と「結びつき」の政治経済史—グローバルヒストリー再考(2) (2021 ~ 2023年度)の成果の一部である。